

また、③へき地医療についても、総合診療部の機能強化により、平成22年度から診療支援を継続している。既に開設されていた④総合周産期母子医療センターに加え、⑤小児医療では専門分化に対応すべく、小児HCUから精神科の領域まで含め、日常診療の幅を拡げつつある。

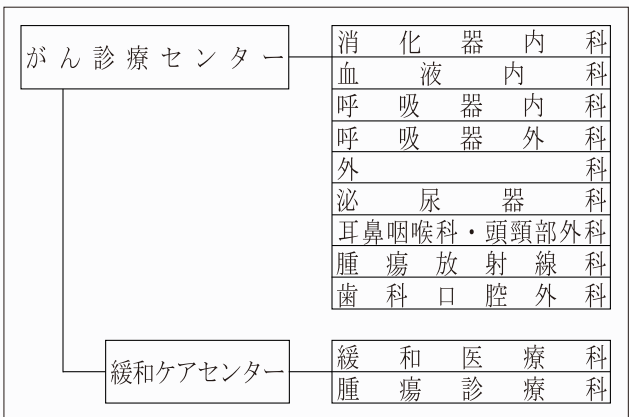
これまでの医療提供のあり方については、患者が一人の医師に全てを委ね、その信頼関係や人間関係に基づいて様々な医療行為を受けるという、「院内完結型医療」が基本だったが、最近では、患者さんがいろいろな病院の特徴を上手に使い分けて、個々の病態の診療を受ける、「地域完結型医療」が望ましいシステムとして登場している。

現在の青森県のがん診療連携拠点病院はこうなっているのかというと、左記のとおりだ。

①青森県立中央病院（青森地域）、②弘前大学医学部附属病院（津軽地域）、③八戸市立市民病院（八戸地域）、④十和田市立中央病院（上十三地域）、⑤三沢市立三沢病院（上十三地域）、⑥むつ総合病

院（下北地域）の6つの総合病院が指定されている。

青森県立中央病院は、各拠点病院の連携の中心となる都道府県がん診療連携拠点病院でもある。



がん診療センターについて

センターを構成する診療科は右図の通りで、計11科、小児がんは小児科で対応している。また、婦人科は県内の厳しい産科医不足のために総合周産期母子医療センターを優先している。県内の骨軟部腫瘍患者は国立病院機構弘前病院に集約することになっている。

前立腺がんの治療に多く用いられている。診療科の垣根を取り払い、各科の専門医と連携して偏りのない集学的治療、標準的治療を実施している。標準的治療とは、現在考えられる科学的根拠に基づいた最適な治療のことであり、平均点の並みの治療という意味ではないという。

吉田さんは県病改革の先頭に立って、センター化によって患者目線に立った体制に変革したいというのがそもその考えだったが、やってみると難しく、病棟を入れ替えることだけでもかなりの労力だったという。とはいえ実際に動き出すと、診療の流れは実にスムーズに運ぶようになった。吉田さんは、組織や体制を変えることが、二種の創造力として院内に大きなインパクトを与えたのだろうと受け止めている。国立がん研究センターからきて、いい意味で地域事情を知らなかったために、改革が可能だったのかもしれないと言う。

（参考）部引用
新しい医療モデルの創造を目指して
青森県立病院 編著

その特長を列挙してみる。めずらしいのは「がん診療センター企画室」だ。他にはないユニークな部門といえるだろう。がん診療センターの運営方針を決定する「がん診療センター会議」を下支えするところだ。会議は医師が49人。年5回の会議が開かれる。数多くの委員会をもち、これらの組織を事務的にとりまとめている。職員は7人。青森県のがん診療の情報をとりまとめ、発信し、舵取り役を担っているといつても良いのかもしれない。内視鏡的粘膜下層剥離術（略してESD）。県病では多くのESD治療をおこなっているが、なかでも大腸がん手術は年に100件程度の実績となる。それまでは県内では弘前大学附属病院が年間80～100件の実績をもつ。現在は胃がんでもESDは月間に8件、食道がんも1～2件の手術を行っている。体に負担の少ない、内視鏡治療はますます重要になってきている。

肺がんの手術にはほとんどの場合、開胸を選択しないで胸腔鏡手術を行っている。胸の中に細い筒状のカメラを入れてモニターを見なが

■あとがき

今回の取材で青森県立中央病院は大きく変わりつつあることが理解できた。吉田さんは2005年に県病改革プランが緒に就いたとき、自分も県外から改革メンバーの1人として、ロードマップ作りに参加していた。余談だが、吉田さんが青森に来る決心をしたのは、このメンバーに加わってプラン作りをする中で、青森県の担当者の言葉に心を動かされたことがキッカケなのだ。それは改革の目的に関してのことだった。「最終的な目標は赤字脱却ではありません。それも重要ですが、最も大事なことは重い病気に罹ったときに東京ではなく、どんな病気も青森で治せるようにしたい」という言葉だった。

その当時に思い描いていた県病の将来像は着実に実現しつつあるという。

今、県病は全国でもめずらしい、優れた「がん診療センター」をもつ施設として、大改革を成し遂げようとしているが、このことはあまり知られていないようだ。地域完結型医療に向けて紹介率8割、逆紹

ら行う。合併症が増えることもなく、患者にとつてやさしい手術方法であるという理由からだ。手術時間は2時間と開胸に比較して大幅に短い。出血量もすくなく50ml以下のこともあるという。

乳がんは具体的には乳房全部を摘出する「乳房切除術」か、一部部位を残す「乳房温存術」に分かれる。県病では可能な限り「乳房温存術」を行っている。全体の9割に相当するという。

最先端ロボット手術支援システム

「ダヴィンチSⅰ」の導入

2014年8月に泌尿器科の手術に最先端ロボット手術支援システム「ダヴィンチSⅰ」が県内では弘前大学附属病院について2番目に導入された。前立腺がんは2020年にはがんによる死亡者数で2位になると予想されており、ますます注目される存在といえる。

大腸がんのうち結腸がんと直腸がんの割合は6対4だ。従来の大腸がんの開腹手術は約20cmの創が残ったが、腹壁の約5cmの切開創から片手を腹腔内に入れて、直接臓器に触れながら、もう一方の手で



介率9割を目標にして、地域でみるということの大切さを分かってもらうことが、これからの地域医療にとつてもっとも大事なことでいい、かかりつけ医と一体となった地域医療システムの中核として機能しようとしている。

青森県民の健康を支え、高度で安全な医療を提供する重要な役割を担う、青森県立中央病院は患者の目線で見た、こころあたたかな病院を目指して、そして県立の総合病院にふさわしい医療施設として日夜努力している。

を用いた治療である。IMRTは